

平成29年6月NHK中央放送番組審議会

6月のNHK中央放送番組審議会は、19日(月)、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、NHKスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	大日向雅美 (恵泉女学園大学学長)
副委員長	渡部 潤一 (国立天文台副台長)
委員	秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター)
	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	今井 忠 (NPO法人東京都自閉症協会理事長)
	大島 まり (東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	立野 純二 (朝日新聞社論説主幹代理)
	永田 紗戀 (書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)
	西原浩一郎 (金属労協顧問)
	比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)

(主な発言)

<NHKスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」

(総合 5月21日(日)放送)について>

- この問題は身近に感じたことがなく、新鮮に学ぶことができた。発達障害の当事者にとっては、どなられているように聞こえるなど感覚的なことも分かりやすく伝えており、なるほどと思った。一方で、画一的に理解させるのではなく、「五感に起因する例もあればそうでない例もある」とさまざまなケースがあることを伝えていた点も評価できる。二次障害や、うつにつながる可能性もあるが、信頼できる人の存在があればそれを回避できるかもしれないという、対処の方法も含めて提案していた。番組に勇気をもって出演された当事者の方々に感謝を申し上げたい。司会

を務めた「あさいち」コンビの井ノ原快彦さんと有働由美子アナウンサーの実力もあった。生放送で難しいテーマであっても丁寧に扱うことができるだろうという、二人に対するNHKの信頼が伝わってきた。「発達障害プロジェクト」という組織横断的な取り組みに挑戦するNHKに敬意を表したい。

- 当事者の感覚がどのようなものなのかを映像で見せ、分析的に落ち着いて伝えていた。日ごろそれほど理解していなかった発達障害を特別なものと感じることなく理解できたのが大変よかった。「小中学生の15人に1人が発達障害の可能性がある」というデータも出していたが、番組で紹介した人たち以外のケース、例えばもっと普通の人に合わせて暮らしている人たちの実情なども分かれば、私たちもいっそう思いやりを持つことができるのではないかと感じた。

- 発達障害を当事者の立場から伝えるという、これまでになかった見方で、とてもよい番組だった。障害のある方々の思いを重視して構成しており、自らを発達障害と公表した方々が登場し、発達障害の特徴を分かりやすく伝えていた。印象的だったのが「顔を見ながら話をするのがつらい」ということばである。私たちは「目を見て話す」と言うが、彼らは「顔」ということばを使っており、違いを感じた。また「小中学生の15人に1人が発達障害の可能性がある」というデータの根拠を示してほしかった。番組では発達障害に対し「生まれつき」ということばを使っていたが、胎児や幼児の脳が発達しているときに受けた農薬など後天的な影響を指摘している団体もあるので、本当に「生まれつき」と言い切ってよいのか気になった。二次障害については、治療の実態や必要性など、引き続き取材をしてもらいたい。NHKに「発達障害プロジェクト」ができたことはうれしく思う。これからの番組に期待したい。視聴者から寄せられた6,700の意見は、ホームページだけでなく番組内でもう少し紹介すれば、より身近に感じられたのではないかと。その点は残念に思った。

(NHK側)

「生まれつき」という表現については複数の専門家と相談し決めた。子育てのしかた、特に親のしつけが原因でそうになってしまうのではないかと、親にプレッシャーがかかるような誤解が多く、実はそうではないということを発信するためにそのような表現にした。二次障害の実態などについても、例えば「ハートネットTV」のような当事者に寄り添った視点で作られる番組の中で取り上げられるとよいのではないかとと思う。視聴者から寄せられた意見については、生放送でスタジ

オでの話が膨らんでしまった分、紹介できる数が少なくなっ
てしまった。3日後の「あさいチ」で発達障害の特集をした
際には、この「NHKスペシャル」に寄せていただいたメー
ルとファクスの意見をいくつか紹介した。今後もプロジェク
トの中で頂いた多くの声を大事にし、番組を作っていくたい。
「小中学生の15人に1人が発達障害の可能性はある」とい
うのは、文部科学省が2012年に行った全国調査のデータを基
にしている。今のところ最も信頼性が高いといわれており、
今回の番組でも扱った。

- イギリスの「クワイエット・アワー」の事例を紹介していたが、日本で同様の取
り組みなどがないのか気になった。知的障害の方々に対してはいろいろな角度から
の支援プログラムが行われているが、今回の番組においても、見た後にそういった
ところにアクセスできるような情報があれば、より実践的なものになると感じた。
2020年を契機とし、障害のある方々との共生社会を実現するには、身体障害者だ
けではなく、あらゆる障害者について理解する必要がある。そうした感覚を視聴者
に持ってもらうという意味で、大変勉強になる番組だった。一方で、知的障害の方
についても番組で扱ってほしかった。また、「小中学生の15人に1人が発達障害
の可能性」というデータについては、私も疑問に思った。昔は発達障害ということ
ばはなかったので、いつの時代からどのように言われてきたのか、何をもって発達
障害と言っているのかななどの掘り下げも欲しかった。
- 子どもだけでなくさまざまな年代の発達障害の人たちを幅広く取り上げたこと
が大きな特徴だったと思う。当事者たちはそれぞれのライフステージにおいて、周
りの人たちの誤解、理解不足に起因するさまざまな批判や偏見、トラブルにさらさ
れていた。ある面では重大なリスクにも直面し、悩み、懸命に生きている当事者の
ことを改めて思い知らされた。彼らを支える家族の苦労についても思い至った。生
活場面や教育現場での再現映像は、視覚、聴覚などの感覚、認知の世界をうまく映
像化していた。発達障害の現実を極めてクリアに示した初めての番組ではないか
と思った。この番組は、多くの当事者たちの理解・協力を得て成り立っており、スタ
ジオに出演した発達障害の当事者たちのやりとりによって、視聴者もいっそう現実
感を持って受け止めることができたのではないと思う。社会全体で考えるべきさま
ざまな課題がきちんと提起されており、社会的意義の高い番組だった。NHKは「発
達障害プロジェクト」として、1年間積極的に発達障害に関する番組を放送してい
くということだ。視聴率が大きく上がるようなテーマではないと思うが、いかに社
会の理解を広げていくのか、NHK総体としての取り組みが問われている。引き続

き尽力してほしい。

- 発達障害の当事者の方の感覚を科学的に示したのがとてもよかったと思う。発達障害と診断され、学校になじめない子の親は、どう子どもをサポートすればいいのか、頭を悩ませると思う。発達障害について科学的にきちんと示すことで、そうした家族の精神的負担を和らげることができる面があると思った。番組の後半では、発達障害を抱えた大人についても取り上げていた。数字に強く、経理の仕事を見事にこなしている発達障害の人の姿と、「彼の得意と不得意をきちんと分かったうえで一緒に働くのが一番いい」と言う同僚のことばには励まされた。スタジオの当事者の人たちを見ても、理解してほしい、受け入れてほしいということばが全てなのだろうと思った。こうした番組によって発達障害への理解が深まり、社会全体がやさしくなっていけばよいと思う。スタジオの当事者たちはどこか悲しそうで、つらそうに映っていたが、普段は得意なことを生かしてこう生きている、というような前向きな姿が見られるのもっとよかった。

- 発達障害についてよく知らないまま番組を見た。外見からは分からない障害のある方がこんなにも多くいることを伝え、またその人たちの感覚を映像化して見せるということに生放送で取り組んだことに感心した。最初から最後まで未消化に終わったのは、番組で紹介した視聴者の声にもあった、「どこまでを個性と呼び、どこまでを障害と呼ぶべきなのかわからない」という点だ。自閉スペクトラム症、注意力散漫、学習障害など、個々の現象そのものの存在については誰しも知っていると思うが、それを発達障害という名前で認識するようになったのはいつごろからなのか。それを障害と認定するにはどういう制度でどういう人たちが判断するのか。子どもの集中力を育てるためのしつけや教育は、意味があるのかないのか。有効な治療法はあるのか。そういった統計的、医学的な側面をもっと掘り下げてほしいと思った。一方で、障害、あるいは個性と呼ぼうが呼ぶまいが、普通ということばには何の意味もなく、人間が100人いれば100通りの普通があり、個々人が違うということを前提に社会を作ろうという番組のメッセージは、いついかなるときもメディアが発信し続けるべきテーマだと思う。その意味で大変有意義な番組だった。

- 科学的、認知的な観点から、発達障害といわれている方が実際に見ている・聞いている世界を映像化したことで、とてもよく理解できた。生放送にしたのもよかったと思う。スタジオにいた当事者の皆さんの顔から、生出演にあたってとても緊張されていたことが伝わってきた。勇気ある決意をし、生放送のカメラの前に出てきたのだろう。それは1人でも多くの人に発達障害に向き合ってほしいという当事者の皆さんからのメッセージだと、強く受け止めた。個性と障害、病気との違い

をどう見極めるのかだが、一概には言えないだろう。ある環境ではそれほど問題にならなくても、ある環境では二次障害、うつにまでなってしまうこともある。今後はそういう実態があることを理解すると同時に、社会が当事者をどのように受け入れるかということも大事だと思う。大企業である程度の余裕があるところは人の配置など番組で紹介したような環境を作れるかもしれないが、そうでない企業や職場も多くあると思う。この番組は発達障害についての理解を促すという意味でとてもよかったが、今後は、そうした人たちをどう受け入れ、共存し、お互いを高める社会を作っていくのかについて、もっと掘り下げてもらえるといいと思った。

○ 番組を見て、何も知らなかったと思い知らされた。社会全体で受け止めるべき課題をつまびらかにし、共有しようという大きな意義のある番組であり、NHKの社会的役割を果たしていたと思う。誰かが取り組まないといけない課題を報道機関として問題提起し、よりよい社会を作るための一助となることはメディアの大きな使命の一つである。いろいろな観点から継続して取り組んでほしい。

○ 意欲的な番組だった。こうしたテーマの番組で生放送は珍しく、難しい面もあると思う。司会の井ノ原さん、有働アナウンサーがもともと発達障害についてよく理解しており、またこの分野におけるNHKの取材の蓄積があったからこそできたのだと思う。そうした蓄積がなく急にやろうと思ってもできなかつただろう。大事なポイントは、障害者とその親だけでなく、一般の人にどれだけ興味を持ってもらうかであり、そのためにはもうひとつ工夫がいるかもしれない。個性なのか、障害なのかということについては、社会が差別するから障害になると理解すれば、障害という概念は相対的なものだと言える。その意味で、社会がその特性に対し障壁を高くしているのならば、個性でなく障害として何らかの「支援」の対象にしないといけないうだろう。そうしたことも今後の番組で掘り下げていってもらいたい。発達障害の人を理解するためだけではなく、発達障害を鏡にすることで、多数派と呼ばれる“普通の”社会はいったいどのようなコミュニケーションを前提に成り立っているのかが見えてくると思う。そうした視点があると、より皆のためになるのではないかと思う。6,700件も寄せられたという視聴者からの意見を今後の番組にも生かしてもらいたい。

そのほか「発達障害プロジェクト」に関する一連の番組では、5月27日(土)のE TV特集「“いるんだよ”と伝えたい～横浜・特別支援学級の子どもたち～」もよかった。5月28日(日)のバリバラ「ティーンズバリバラ～発達障害の悩み～」は中高生が8人出演していた。中高生が出演するのは珍しい。彼らの声をどう受け止めるかは大きな課題だと思う。いずれも意欲的な番組だった。

- 25年ほど前、当時は自閉症と言われた小学生と接したことがある。親の育て方が原因と言われ、母親は苦しんでいた。そうした経験を振り返り、今の時代にこういう番組ができたことをうれしく、感慨深く見た。NHKならではの意義ある番組だった。そうであればこそ、委員からは今後への要望などの意見もあったが、どうか。

(NHK側)

今回は発達障害に特化し、知的障害については触れなかった。今後どう取り上げるか、考えていきたい。どこまでが個性、どこまでが障害かという問いについては、スタッフの中でも議論になり、複数の専門家にかなり取材をした。アメリカや日本では自閉スペクトラム症の診断基準の一つに「生活に支障があること」という意味合いの項目がある。生活に支障がなければ障害と診断されない。周りがどれだけ理解し、支えてくれているか、その環境により診断も左右される。周りの理解が進めば、障害だという診断にならない人も数多くいると思う。それが、個性が障害にならない、ということになるかと思う。今後さまざまな番組を通し、周囲の人たちの理解を広げることで、個性が障害にならない社会になるように手助けができたらと考えている。

- この番組は発達障害の方を理解するだけでなく、普通とは何かという、私たちが暮らす社会の前提そのものを洗い出すような大きくて重いテーマを抱えていると思う。「発達障害プロジェクト」も立ち上げたということで、今後もますます期待している。

<放送番組一般について>

- 5月28日(日)のNHKスペシャル「変貌するPKO 現場からの報告」を見た。南スーダンのPKOに参加した陸上自衛隊の施設部隊帰国のタイミングをとらえたタイムリーな放送だったと思う。昨年7月の首都ジュバにおける政府軍と反政府勢力との武力衝突の際に、宿営地の隊員たちがいかに緊迫した危機的状況に直面したのかが、隊員の証言やスマートフォンの映像、現地での取材などにより、生々しく伝わってきた。NHKの取材力を発揮した優れた報道番組だったと思う。PKOに求められる役割が、従来の停戦監視、復興支援から、より積極的な武力行使を伴

う文民保護に大きく変貌してきたことを分かりやすく伝えていた。また各国がその問題にどう向き合っているのかについても分かりやすく伝えていたと思う。日本の南スーダンへのPKO派遣をめぐっては、現地情勢が深刻化する中、PKO参加5原則との整合性が問われる状況にあったことは事実で、その間に防衛省の日報隠しという重要な問題も発覚した。番組では、オランダでは軍が積極的に情報開示をし、PKOのあり方について国民的な議論がなされていることを伝え、日本でも徹底的に議論する必要があることを提示していた。そうであればこそ、国民への情報公開がいかにか今の日本で問題になっているのかをもっと鮮明に伝え、問題点をより明らかにすべきだったのではないか。ジャーナリズムの観点からもう少し踏み込んでもよかったのではないかと感じた。

(NHK側)

NHKスペシャル「変貌するPKO 現場からの報告」は、駆けつけ警護の任務が与えられた安全保障関連法の成立で関心が高まる中、継続的に取材してきたことをまとめた番組だ。防衛省は部隊の取材には応じられないということで、南スーダンの現状を伝えるために自衛隊員に直接取材を行った。PKOも含めた国際貢献のあり方について、幅広い議論を行うための前提となる事実をきちんと提示することに意味があると考えた。オランダの例も引き合いに出し、情報公開の大切さを提示したうえで南スーダンの現状をきちんと伝えることが、国民の判断材料になると考えた。委員からの指摘も踏まえ、今後どのように伝えていくか考えたい。

- 事実を淡々と伝えることも公共放送の役目だが、重要なポイントに関しては、NHKならではの踏み込んだ視点も示してもらえるとのことで、今後も期待したい。
- 6月4日(日)のNHKスペシャル 私たちのこれから「#子どもたちの未来」を見た。これまでもNHKが熱心に取り上げてきた子どもの貧困問題についての番組だった。その対策の道を探る観点から、専門家、有識者とともにさまざまな立場の市民が参加し討論していた。印象的なキーワードもあり、感情論もあったが、本音の論議がされており、有意義な番組だったと思う。「私たちのこれから」は、毎回社会のあり方に関わる多様なテーマから重要な問題提起をし、議論を行う有益なシリーズだったが、今回が最終回ということで残念だ。多様な立場の市民が専門家、有識者と同じスタジオで討論するという番組がどんどん少なくなっていると思う。公共放送としてこうした形の番組は続けてもらいたい。

(NHK側)

「私たちのこれから」は、もともと「日本の、これから」というタイトルで放送していた。この番組は、2004年の不祥事以降、NHKに対して厳しい視線がある中で、視聴者とともに踏み込んだ議論をする討論番組として立ち上げた。それがタイトルを変え「私たちのこれから」となった。キャスターを務めてきた三宅民夫アナウンサーが替わるタイミングで一度番組は終わるが、今後は違うキャスターで、未来の課題を考える新しい形の市民討論番組を開発したいと考えている。

- NHKスペシャル 私たちのこれから「#子どもたちの未来」はおもしろかった。過去のデータを基に、大学へ行かない人は生涯収入が少なくなる可能性があると言っていた。今まではそうだったかもしれないが、この先の社会では、早くから働き、手に職をつけたほうがよいこともあるのではないかとも思った。やや単一的な考え方で、もう少し広がりを持たせたほうが、多様性ある社会の実現に向けてより明るくなるのではないかと感じた。ファクトに基づくことは大事だが、過去のファクトが、人口減の中で同じファクトとしてあり続けるのか、将来のことも勘案したほうがよいと思った。
- 6月11日(日)のNHKスペシャル ニッポンの家族が非常事態！？ 第2集「妻が夫にキレル本当のワケ」は家族でおもしろく見た。オキシトシンやテストステロンといったホルモンの観点から、なぜ妻がキレルのかについて分析しており、斬新な番組だったと思う。ただ、妻がキレル理由は本当に番組で紹介していた問題だけに起因するのだろうか。限られた時間の中で、最新の脳科学や性ホルモンの研究に焦点を当てたこともあるのだろうが、科学的な裏づけとして、それが「キレルワケ」とどのような関係があるのかが、少し分かりづらかったと思う。

(NHK側)

NHKスペシャル「妻が夫にキレル本当のワケ」は多くの夫婦に共感を持って見ていただいた。昨年6月に放送したクローズアップ現代+「妻が夫にキレルワケ～“2800人の声”が語る現代夫婦考～」では、2,800人の既婚の男女に独自調査をしたのだが、そうしたデータと専門家の所見を基にして番組を進行した。オキシトシンなどの分析については最新の科学でかなりはっきり分かってきた分野でもあり、学会で

も主流の説になってきていることを踏まえて番組で扱った。
番組独自に説を展開したわけではない。

- 6月17日(土)のNHKスペシャル選「ある文民警察官の死～カンボジアPKO 23年目の告白～」を見た。三つの賞を受賞した番組で、改めて平和の重さを感じた。今の日本のPKO派遣に23年前の経験が生かされているのかは分からないが、このタイミングでNHKがこうしたドキュメンタリーを放送した意味は大きいと思う。南スーダンでいま起きている現実も伝えてほしいと思った。
- 6月18日(日)のNHKスペシャル「睡眠負債が危ない～“ちょっと寝不足”が命を縮める～」を見た。科学的な知見に基づき、分かりやすく説明していた。睡眠不足が体によくはないことは昔から言われているが、それを具体的に伝えた意義深い番組だった。生放送で視聴者とのインタラクティブなつながりを意識していた一方で、臨機応変に対応することの難しさも感じられた。視聴者から「自分は夜勤の仕事だがどうしたらよいか」という質問があったが、出演者に若い人が多かったからか、誰もうまく受け止められていなかった。出演者は感じのよい方ばかりでよかったが、工夫の余地もあると思った。
- NHKスペシャル「睡眠負債が危ない～“ちょっと寝不足”が命を縮める～」はおもしろく見たが、生放送の必要はあったのか。データ放送の機能でお茶の間とつながりたかったのか。

(NHK側)

生放送により可能になるリアルタイムでの視聴者参加を重視した。データ放送や特設サイトを活用したリスクチェックのシーンでは、同時に27万人もの視聴者に参加いただいたが、番組に出演した専門家もこれだけのデータが集まったことに驚いていた。視聴者から寄せられた質問に対し、その場で答えられるという利点もある。収録し、時間をかけて編集することで、情報性を高める方法もあるが、今回は双方向性を大切にするトライアルという意味で、生放送にした。

- 番組自体には感心したのだが「睡眠負債」ということばは学術的に大丈夫か。私は初めて聞くことばだった。共通した概念があるのかどうか疑問に感じた。

(NHK側)

「睡眠負債」はNHKによる造語ではなく、専門家の間でもすでに使われ始めている概念だ。

- 私も「睡眠負債」ということばを初めて聞いた。「睡眠不足」よりもインパクトがある。仕事をがんばっている人などがよく「睡眠不足だ」と言う風潮があると思うが、「睡眠負債」となるととても重く感じる。きちんと寝て、仕事の効率を上げて働くことは大事だと思うので、よい番組だと思った。
- 6月4日(日)の「どーも、NHK」で、各局に配属になった新人アナウンサー12人を紹介するコーナーがあり、フレッシュな様子を見ることができた。リポートの訓練で、先輩のアナウンサーが「生き生きと伝えることとキャピキャピすることは違う」と新人の女性アナウンサーを指導しており、NHKにはそういう人がまだいるのかとうれしく思った。NHKのアナウンサーは昔から落ち着きと品格、美しいことばに定評があるが、最近是一部で民放よりキャピキャピしている方がいるという声も聞こえてきたところだったので、先輩アナウンサーがそのように指導していることに改めて感銘を覚えた。今後もそうした指導を続けていってほしい。
- 6月8日(木)のくらし☆解説「乳製品 原料不足の背景は？」では、乳製品の原料不足の背景を10分間で的確に取り上げていた。なぜ脱脂粉乳が不足するかというと、国が輸入自由化の対象にし、その保存性の高さから輸入量が多く値段がつきにくいため、国内の酪農家が出荷しないからだ。2年前、バター不足の原因は流通や指定団体などの問題ではないかと喧伝(けんでん)されたこともあったが、そうした誤解は今ではほとんど解けたと思う。さらに番組では、肉用の子牛が高値で売れることから、肉牛を積極的に種付けするため、乳牛の数が減っているという構図についても解説していた。派手さはない番組だが、問題の背景について真正面から解説してくれたことはよかったと思う。
- 6月10日(土)の旅旅しつれいします。第1回「世界のオモシロ旅人に会いに行こう！浅草の車夫トリオ 人力車で世界一周！」(総合 後 11:25～<11日(日)>前 0:00)と、17日(土)の旅旅しつれいします。第2回「旅人数珠つなぎ タイで一番のオモシロ旅人を探せ」(総合 後 11:25～<18日(日)>前 0:00)を見た。若者たちが自らの限界をかけて海外でいろいろな旅をしており、すがすがしさを感じた。こんなにも旅の中で自分の思いをストレートに表現しようとする日本人がいることに驚いた。私が若いときとは違う旅のしかた、自分の思いを遂げるための生き方をいろいろと見せてもらった。こうした旅が若者たちの10年後、20年後にどんな影響を与え、その時彼らがどんな生活をしているのか、とても気になり、見てみ

たいと思った。

6月12日(月)のクローズアップ現代+「“新たな”アスベスト被害～調査報告 公営住宅2万戸～」を見た。NHK独自の全国的な調査結果の報告で、NHKらしく、とてもよくまとまっていたと思う。アスベストへの注意喚起を視聴者に促し、被害が終わっていないこと、およそ23万8,000人がアスベストを吸い込んだ可能性があるという具体的な数字を示していた点はよかった。アスベストについては、平成17年の「クボタショック」のかなり前から、「静かな時限爆弾」として問題化し、さまざまな措置が求められてきた。当時は小学校、住宅の壁にも使用されており、主にそこで働いていた建築関係の方々のアスベスト被害が中心だった。今回の番組では住んでいただけで被害に遭った事例が紹介されており、住宅のアスベスト被害は2040年ぐらいまで注意が必要だということで、大変な状況であることがとてもよく分かった。23万8,000人というのは公営住宅だけの数字なので、今後どれだけの被害者が出るのか、とても大きな問題なので、引き続き取材を続けてほしい。

- 「静かな時限爆弾」というのは言い得て妙で、大事な番組を作ってくれたと思う。

(NHK側)

今回の調査はまだ立ち上がった段階だが、新たなことが分かればニュース・報道番組などで引き続き伝えていく。

- 6月16日(金)に放送した「L I F E ! ～人生に捧げるコント～」(総合 後10:00～10:48)が周囲でも話題になっている。インターネットで提供しているサービス「NHK1.5チャンネル」でも関連の動画を見られるようになっており、「誰でも使えるムロツヨシからの結婚お祝いVTR」など、どれもおもしろい。NHKの番組でこれほど話題になるのはすごいと思う。次の特集は8月を予定しているそうだが、放送が待ち遠しい。

この春から「L e t ' s天才てれびくん」が「天才てれびくんYOU」にリニューアルし、出演者も替わった。西川貴教さんが出演し、童謡をクイズにして歌うのだが、子どもにすごく受けている。私には懐かしい童謡だが、とても上手に歌っており訴求力があるようだ。家事で忙しい時間に、この番組のおかげで親は楽ができると思う。

- 6月4日(日)と11日(日)のBS1スペシャル「知られざるトランプワールド～360°カメラが探訪する 新大統領を生んだ世界～」(前・後編)(BS1 4日(日)前0:00～0:49、11日(日)後10:00～10:49)を見た。トランプ大統領の交渉

術にどう対応したらよいかなどを考えさせられ、実践的な意味で大変おもしろかった。スマートフォンやタブレットで視聴できる 360 度カメラの映像は、私の端末の問題かもしれないが、画面が途中で止まってしまっていて見られない場面もあった。この番組がふさわしかったのだろうか。

(NHK側)

スマートフォンやタブレットと連動させ、放送と同時にテレビ画面には映っていない映像を手元の端末で 360 度楽しむことができるという、新しい技術への挑戦だった。実際に端末を動かしてみるとなかなか難しく、うまく見られなかったという声も少なからずあった。こういったテーマではなく、自然番組などのほうが分かりやすいのではないかという意見も頂いたが、こうした技術にさまざまな形で挑戦し、放送の新たな可能性につなげていきたいと思う。頂いた指摘は制作担当者にも伝える。

- 5月27日(土)のスーパープレミアム「世界プリンス・プリンセス物語」(BSプレミアム 後9:00~10:59)を見た。歴史的、文化的な背景を含め、プリンス・プリンセスが担っている重責が、いろいろな視点でまとめられていておもしろかった。ベルギーのマティルド王妃や、国を背負っているというヘンリー王子のエピソードには感動した。有意義で興味深い番組だったが、BGMの選定が気になった。また司会の女性アナウンサーは好きな人だが、プライベートな面にいささかこだわった演出が気になった。
- 6月3日(土)の「ヨーロッパ・星付きシェフからの招待状」(BSプレミアム 後7:30~8:59)は楽しく、元気の出る番組だった。料理の本場ヨーロッパに修行で渡ったものの、「日本人は安くてよく働く労働力だ」としか思われず、給料袋もほかの人は名前が書いてあるのに「日本人」としか書かれなかったというようなところから発奮し、星付きシェフになるという話だった。人生にはいろいろな選択肢があり、それが提示されることも重要だと改めて感じた。
- 加計学園の獣医学部新設をめぐる問題について。視聴者に判断材料を提供することはNHKの大事な役割だと思う。文部科学省の内部文書の存在について、NHKでは民放各社より先に報じていたと思うが、一部黒塗りされた文書を放送で出していた。いきさつはよく分からないが、結果的にはその翌日に他社が大々的に報道したことで、先を越されたような印象になった。最初の報道では、NHKの取材力に

対しさすがと感じていただけに格好が悪いように思え、なぜなのかと感じた。

(NHK側)

個別の編集判断、取材の過程については答えるのを差し控えるが、指摘のニュースについては、NHKの独自取材によるものも含め、視聴者の判断材料になるような情報を随時伝えている。今晚19日(月)のクローズアップ現代+「波紋広がる“特区選定”～独占入手・加計学園“新文書”～」でもこの問題について取り上げ、独自ニュースも含めて幅広く伝える予定だ。「NHK NEWS WEB」にも特設サイトを設け、視聴者の関心に応えるべく、情報を伝えている。

- 獣医学部新設に関する文書の問題については、「ニュースウォッチ9」の男性キャスターが真剣な顔で「国民の疑問に答えなくてはいけない」と真正面から言っていたことに好感を持った。最初に報じた「ニュースチェック11」をたまたま見っていた。あの段階で黒塗りにせざるをえないNHKの判断もあったのだろうということも理解するが、翌日の他社のニュースは大きく異なる報道という印象だった。NHKの記者も総力を挙げて取材してきたと思うが、なぜ他社のスクープという世の中の印象になってしまったのだろうか。ニュースは速ければよいわけではなく、正確さを追求することもNHKの使命だと思うし、いろいろな考えがあることは理解するが、この点について出された各委員の意見も受け止めてもらえたらと思う。

(NHK側)

この問題も含め、あらゆるニュースについては、いろいろな角度からできるだけ多くの情報を集め、しっかりと確認している。その上で、真実に迫り必要なものを報道するという姿勢は、どんな場合も変わらない。誰かから何かを言われて内容を変えたり、放送しないということは一切ない。報道機関として自主的に判断し、正確である、真実に迫っていると言える事柄については、きちんと伝えるという姿勢だ。今回の委員の意見はきちんと受け止めるが、そういう姿勢でいることは理解いただきたい。

- 北朝鮮のミサイル問題について。国民の安全に関わる問題なので、直ちに正確に報じなくてはいけないが、ミサイル問題は国家的な脅しという性格を帯びており、国民に恐怖を与えようという意図の下に行われている側面がかなり強い。そんな中、

北朝鮮のミサイル発射についてどれだけの規模で報じるべきか、メディアは常にジレンマを抱えている。NHKはどれほど悩んでいるのかと疑問に思うほど、民放と比べて報道の時間が極端に長いと思う。また、勇ましい北朝鮮の映像などを繰り返し流している。安全に関わる問題なので報じるのは当然だが、その時間については疑問に思う。元自衛隊の解説者が、NHKの番組で「正しくおびえることが大事である」と言っていた。6月8日(木)に発射された巡航ミサイルのケースでは、菅官房長官も「日本の安全保障に影響を与えるものではない」と認めていたが、そのときも「NHKニュース おはよう日本」では民放と比べても長い時間報じていた。そのあたりの考えを聞きたい。

(NHK側)

NHKもそのジレンマに悩まされている。ミサイルを発射したという事実がある以上は伝えなければならないが、視聴者の不安を無用に増大させてはならない。われわれがまず考えているのは、ミサイルが日本の領海、領空を飛ぶときに発信されるJアラートの有無をできるだけ早く伝えることである。海上保安庁、自衛隊などの情報の出し方も踏まえ、適切な報道のしかたについて検討している。報道の時間が長いという指摘だが、6月8日(木)の巡航ミサイルの発射の際は、弾道ミサイルの発射の時と比べ放送量をかなり減らしていた。ケース・バイ・ケースで対応している。

NHK編成局
番組審議会事務局